

## 島根大学言語教育研究会 第12回研究発表会 報告

日時 平成23年9月16日(金) 18時～19時30分

会場 島根大学教育学部 212 研修室

発表題目 漢文学習考

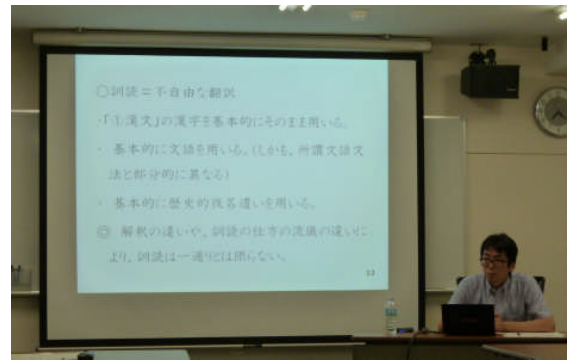
—「漢文学基礎講義」の実践を通して—

発表者 竹田 健二

司会 富安 慎吾

### 〔発表の概要〕

平成23年4月より全面実施されている「小学校学習指導要領」には、第5学年及び第6学年の目標及び内容の中に、「伝統的な言語文化に関する事項」として、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」などが新たに加わった。ここで「漢文」とされているものは、小学生が「音読」するものであることから明らかなように、訓読され書き下し文となったものを指す。



しかし、「漢文」の語が必ず書き下し文を指すわけではない。①所謂「白文」(文言文。古代中国の書き言葉で書かれた文章)、②訓点付き漢文(①を訓読し、訓点を付したもの)、③書き下し文(②の訓点に従って①を漢字仮名交じり文にしたもの)などはいずれも「漢文」と称されることがある。

漢文の訓読によって生み出される「③書き下し文」の文体は、日本語の表現の中の一つの独特なスタイル(漢文訓読調)として成立し、現代日本語の世界にも生きている。だからこそ「国語」として漢文を学ぶ意義がある。またそもそも日本語を書き表す文字として今日我々は漢字を使っており、日本語には漢語が多数含まれている。日本語の世界には漢文が入り込んでいるといつてよい。「漢語」を理解し、適切に使うことができるようになるためにも、漢文学習は必要であると発表者は考える。

もっとも、「訓読」とは何かということは、今日では十分には理解されていない。発表者はこのことを、教育学部の国語主専攻・国語副専攻の学生全員に必修となっている授業科目「漢文学基礎講義」の担当を通して痛感している。

訓読は、古代中国の書き言葉で書かれた「①漢文」を、日本語として意味の通る表現に置き換えるもので、一種の翻訳である。そもそも「①漢文」の意味が把握できなければ、訓読することはできない(機械的に訓読することはできない)。もっとも、訓読は翻訳の一種であるとい



っても、さまざまな制約があり、不自由で、現代人にはわかりにくい翻訳である。或る漢文を訓読した場合に、その訓読が一通りになるとは限らない。同じ漢文が異なる訓読で読まれることもあれば、異なる漢文の訓読が同じになることもある。

高等学校の「国語総合」において、漢文の入門として「訓読の基礎を学ぶ」ことが目標とされることが多いが、具体的な学習活動としては、①を②にすることはほとんど行われていない。教材として示されている②を、既に付されている訓点に従って③にし、そしてそ



の内容を解釈することが専ら中心となっている。「訓読の基礎」を学ぶというからには、本来①を②にする学習活動が不可欠であり、そうでなければ教材に付されている訓点について学習者に説明することができないと発表者は考える。そこで、担当する「漢文学基礎講義」の目標として「辞書を活用して、基礎的な漢文を自力で訓読できるようになること」と設定している。

「基礎的な漢文を自力で訓読できるようになる」ことを目指す授業を展開するにあたり、受講者にとって大きな障害となっていると思われるのが、漢字についての理解不足、特に字義の理解が不十分である点である。このことは、現在行われている小学校以降の国語科における漢字学習が、常用漢字表に定められた漢字の字形と読み(音読み・訓読み)の学習に力点を置き、字義の学習をなおざりにしていることに起因すると考えられる。「漢文学基礎講義」の中では、漢和辞書を授業に持参することを義務づけ、辞書を活用できるようになることも併せて指導している。

「漢文学基礎講義」の実践を通して、現在の国語科における漢文学習の問題点を考えるならば、以下の二点が主な問題点であると考えられる。

第一に、漢文学習における訓読の学習の位置付けが明確ではないことである。訓読の学習としては、②訓点付き漢文の解読を中心とした学習だけではなく、①に自分で訓点を付す学習が重要である。そうした学習を進める中で、学習者は漢文訓読調の日本語の表現に通じ、また日本語の中に実に数多く含まれている「漢語」の理解を大いに深めることができるようになるものと期待される。

第二に、漢文学習と漢字学習とが結合していないことである。漢文学習を通して、漢字についての理解(特に字義の理解)を深める学習を積極的に行い、漢字学習と漢文学習とをより緊密に結合させる必要がある。そもそも国語科教育における漢字学習の枠組みとして、「常用漢字表」(2010年改訂)をそのまま用いることには問題がある。

